学校だより
10月
かわい
令和５年９月２９日
http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/

個別最適な支援

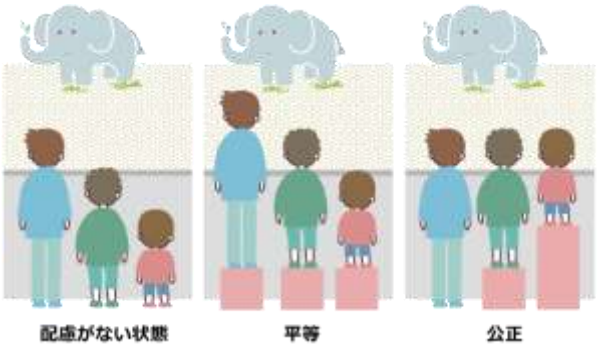
校長　窪田　剛久

今年は東京都心での真夏日がおよそ 90 日。年間の約 1/4 が真夏日となります。もちろん日本には四季といって季節は 4 つあるのですが、そのうち 1/4 が 30℃を超える真夏と言うのは、やはり温暖化に振られすぎているとしか思えません。ケッペンの気候区分には使われていませんが、日本は「温帯」ではなく「亜熱帯」の気候区分に入れた方がいいのかもしれません。早くもこの冬が「暖冬」になるとの予報が出されました。農作物へ影響など様々な懸念が頭をよぎります。川井小でも運動会練習が始まりました。引き続き熱中症対策を行いつつ、慎重に活動を進めていこうと思います。

そうした中、つい先日 456 組の大池宿泊体験学習を無事に終えることができました。これで今年度の宿泊体験学習は全て行ったことになります。改めてご理解、ご協力いただいた保護者の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、今回の体験学習は現 456 組として行う、初めての宿泊体験でした。2 日間を共に過ごした子どもたちの顔には少し疲れも見られましたが、晴れやかな達成感も色濃く浮かんでいました。大変暑い中でしたが、無事に帰ってくることができ安心いたしました。456 組の体験学習に同行したことで気づいたことがあります。それはプログラムの構成に大変ゆとりがあるということです。子どもたちがスケジュールに追われることなく、一つ一つの活動を心ゆくまで味わい充実感をもっていました。まさに成功体験の詰まった体験学習と言えます。もちろんこうした成果にたどり着くために、入念な準備と緻密な計画があったことは言うまでもありません。

今日本の学校教育現場では「誰一人取り残すことのない学び」の実現に向けて努力を重ねています。「誰一人取り残さない」（no one will be left behind）は、2015 年に国連で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中に、宣言として明記されています。誰一人取り残さないために、SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）では「すべての国、すべての人々、および社会のすべての部分で満たされること、そしてすべての国とステークホルダーは、最も遅れているところに第一に手を伸ばすべく努力する」とあります。教育現場で「誰一人取り残さない」ことに注力する背景には、以前に比べ子どもたちの多様性が一気に明らかになってきたこともあるでしょう。日本語指導が必要な子どもの増加をはじめとして、今までは「本人の努力不足」とされていたことが、そうではないこともたくさん分かってきました。



こういった情勢の中注目されてきたのが「合理的配慮」です。すべての人が等しく教育や就労の機会を得ることができるように合理的な配慮が必要であるといった考え方です。456 組は特別支援教育を最も推進しているクラスなので、もちろん「合理的配慮」については意識を高くもって、日々の教育活動に取り組んでいます。そうした配慮が行き届いた中で実施した宿泊体験学習だったからこそ、ゆとりあるプログラムの中でみんなが満足感のもてる活動になったのではないでしょうか。こうした「合理的配慮」は教育活動のあらゆる場面で今求められています。

先日、文部科学省が作成する「生徒指導提要」が 12 年ぶりに改訂されました。「生徒指導提要（改訂版）」の「まえがき」では、求められる教育について次のように述べられています。「子供たちの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育には、子供の発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められています。」つまり、子どもは一人一人違うのだから、一人一人に最適な学びができるような教育が求められているということです。先ほど「特別支援教育」と言いましたが、もはや特別な支援ではないと言ってもいいかもしれません。個別最適な学びを実現するには、個別最適な支援が必要であることに他ならないからです。

今回 456 組の宿泊体験学習に同行し、たくさんのことに改めて気づかされました。川井小学校では今後ますます個別最適な学びの実現に向けて、子どもたち一人一人にとって最適な支援を追求していきます。川井小学校のチャレンジに、今後ともご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。